



道央自動車道江別西インターチェンジ付近で救護された オオハクチョウーその問題点と教訓

An emergent relief performed for an injured whooper swan near to the interchange of *Ebetsu-Nishi* on the Hokkaido Expressway, Japan; its epidemic issues

浅川満彦

Mitsuhiko ASAKAWA

酪農学園大学 獣医学群 獣医保健看護学類
School of Veterinary Medicine, Rakuno Gakuen University
〒069-8501
北海道江別市文京台緑町582番地
TEL: 011-388-4758 (獣医寄生虫病学研究室: ダイレクトイン)
TEL: 011-386-1111 (野生動物医学センターWAMC内線4090から4092)
FAX: 011-387-5890 (獣医学群事務室)
E-mail: askam@rakuno.ac.jp

はじめに

2004年4月、酪農学園大学野生動物医学センターWAMCは文科省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の一環として、当時、大学附属動物病院(現・動物医療センター)構内に設立され、野生種や非典型的な飼育種を対象に多様な疾病研究を展開してきた。直近の研究・教育活動については浅川(2019a, b)を参照頂きたい。

ところで、WAMCが動物病院構内にあることから、一般には野生動物の救護施設のような印象を与えることは否めない。そこで、本務である研究に支障が無い限り、江別市や北海道石狩総合振興局などのご理解・ご支援・ご依頼を受け、毎年20から30例ほどの野生動物の傷病救護個体も受け入れている(吉野ら, 2014; 古瀬ら, 2015)。

しかし、このような救護活動に関しては、様々な問題点や課題も指摘されている(たとえば、日本獣医師会, 2016)。今回は、直近の2019年秋、道央自動車道付近で発生した事例について簡単に紹介し、これらから得られた感染症に関わる教訓を皆さんと共有をしたい。なお、本症例は野生動物救護症例を扱った獣医系のニュースレターでも扱われたが浅川(2019c)、今回は追加情報と共に、一般の方にも理解しやすい形に改変をしてお伝えする。

オオハクチョウ救護個体の発見された場所の概要

2019年9月21日(土曜)13:30頃、江別市民の男性が道道江別インター線を自動車で行き中、衰弱したオオハクチョウ1羽を道央道インターチェンジから西方約600mの地点、麻別川と吉井川という小河川に挟まれた耕作地で確認された(図1)。



図1 傷病オオハクチョウの捕獲地点と道央道インターチェンジとの位置関係

救護個体がWAMCにまで搬入された経緯

その男性は、仕事の関係上、大型段ボール箱を乗用車に常時積んでいたことから、現場に直行し、当該個体を収容した。この収容の翌日午後、酪農学園大学附属動物医療センターに運ばれた。その日は日曜であり、本来ならば当該医療センターは閉院されていたのだが、江別市動物愛護デーであったため、センター長と事務職が、偶然、出勤をしていた。しかし、折悪しく、WAMC運営責任者の著者は札幌での会議出張のため、その場には立ち会っていないかった。そこで、センター長の判断として、急遽、WAMCに搬入された。その段階では、当該個体は衰弱が激しく、個体が暴れるようなことはなかった(図2)。



図2 傷病オオハクチョウのWAMC搬入時点での様子(嘴保定テープ除去)

WAMCにおける対応と個体の状態

しかし、鳥インフルエンザウイルスの保有状況、すなわち、秋から春の渡り鳥、特に、ハクチョウを含むカモ類ではこのウイルスを高率に保有する我々の研究結果(Onuma et al., 2017; Kakogawa et al., 2020)から、WAMCへのカモ類の搬入は原則禁止していた。残念ながら、この事実が学内でも周知されておらず、今回のような事態となった。

札幌から帰任、この事実に接し、著者としては大いに悩んだが、まず、搬入されたその夜半と翌日、インフルエンザキット(これは北海道石狩総合振興局から毎年、WAMCの救護活動に対し報償品として支給されたもの)を用い、クロアカおよび喉頭の拭い液を材料に検査を計

3回実施した。いずれも陰性を確認した(図3)。

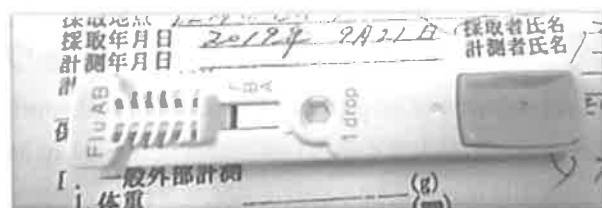


図3 傷病オオハクチョウのクロアカおよび喉頭拭い液を材料にインフルエンザキットで検査をしている様子(バーは陰性結果を示す)

9月23日(月曜)午前、本学附属動物医療センターと捕獲をされた男性市民の方には、この陰性結果をお伝えした。加えて、当該市民には、江別市への今般の救護・搬入をした事実を通報するように依頼した。

当該個体は右翼を下垂(図4)、同部風切羽を中心に損傷が確認され、骨折が疑われたので、当該医療センターのポータブル・レントゲン装置による撮影を依頼したが、バイオリスク上、不可とされた。WAMCにて経過観察を実施、食欲旺盛で、元気もあり、翼損傷部含めて出血部は認められなかった。



図4 WAMC外部に併設された専用ケージに収容された傷病オオハクチョウの様子

しかし、WAMCの所在地は家畜入院舎と獣医学群放牧地に挟まれていることから(図5, 6)、バイオリスクの観点からこの個体の継続飼育は許容されなかった。そこで、行政上、ハクチョウ類は非対象と規定されている江別市には、石狩総合振興局との協議を仲介頂き、可及的速や

かに放鳥と決定された。原則としては、捕獲された場所に戻すことであるが、前述したように高速道路のインターチェンジに近接した場所であり、放鳥後の交通事故が懸念された。そこで、移動による個体への影響を考え、WAMCに近接した野幌森林公園内の貯水池とされた。



図5 傷病オオハクチョウが収容されたWAMCと動物医療センターなど酪農学園大学構内の他施設・農場との位置関係（空撮写真は本学入試課提供）



図6 動物医療センターなど酪農学園大学構内の他施設・農場と家畜飼育エリア（不定形な囲み）との位置関係（空撮写真は本学入試課提供）

そこで、9月27日14:00、当該個体を捕獲した方の車輻により運搬され、無事、放鳥された（図7）。また、

WAMCに収容された6日間に当該個体に与えた飼料についても、この個体を持ち込んだ市民にご理解頂き、購入して下さった。個体収容され、その後も、このようにフォロー頂くことは少なく、敬意を表したい。



図7 オオハクチョウ放鳥の様子（この写真の人物がオオハクチョウを救護、WAMCに搬入された方）

今回の教訓

鳥インザイルスの侵入時期となる秋・春期のカモ類搬入禁止について、学内外に十分周知していないことが判明した。当該時期の危険性、傷病個体の対処法、放鳥時の交通事故などの二次的な災害の防止などについて、江別市と協働で丁寧な市民教育をすべきでことが明確となった。そこで、2020年7月17日（野幌公民館）、同市と本学社会連携センターが共催で、急遽、「野生動物救護の実際と問題点（野生動物との共存）講座」（仮題）を行うことになった。かつてないことで、期待したい。

引用文献

- 浅川満彦. 2019a. 2018年における酪農学園大学野生動物医学センターWAMCの研究活動報告. 北獣会誌, 63: 6-10.
- 浅川満彦. 2019b. 2018年における酪農学園大学野生動物医

- 学センターWAMCの教育・啓発活動報告. 酪農大紀、
自然, 43: 117-126.
- 浅川満彦. 2019c. 直近1年間に酪農学園大学野生動物医学
センターWAMCに搬入された傷病野生動物のうち3
例から得られた教訓. サポート (野生動物救護研究会),
(129) : 5-8.
- 古瀬歩美・牛山喜偉・平山琢朗ほか. 2015. 酪農学園大学
野生動物医学センターWAMCにおける傷病鳥獣救護
の2011年度以降の記録. 北獣会誌, 59: 184-187.
- Kakogawa, M., Onuma, M., Saito, K. et al. 2020. Epidemio-
logical survey of avian influenza virus infection in
shorebirds captured in Hokkaido, Japan. *J. Wildl. Dis.*,
56: in press.
- 日本獣医師会. 2016. 保全医学の観点を踏まえた野生動物
対策の在り方, 日本獣医師会, 東京: 216.
- Onuma, M., Kakogawa, M., Yanagisawa, M. et al. 2017.
Characterizing the temporal patterns of avian influenza
virus introduction into Japan by migratory birds. *J.*
Vet. Med. Sci., 79: 943-951.
- 吉野智生・上村純平・渡邊秀明ほか. 2014. 酪農学園大学
野生動物医学センターWAMCにおける傷病鳥獣救護
の記録 (2003年度-2010年度). 北獣会誌, 58: 123-129.